

アスレティシズム興隆の時期区分に関する一考察
— 「パブリックスクール」の出現と生徒数の変動と関連して—

阿部 生雄

Developmental Epochs in the Rise of Athleticism
— In Relation to Emergence of ‘Public School’
and the Trends of Boys’ Enrollment —

ABE Ikuo

Abstract

Sports historians like P.C. McIntosh and J.A. Mangan suggested that the growth of athleticism as a modern spirit of sport emerged by 1850 and reached its zenith around 1875. However, it is still uncertain what kind and state of public schools brought about the athleticism. This study tries to define the periods of its emergence and peak by means of the historical statistics such as enrollment of boys and boys' entrance to universities, Oxford and Cambridge. The focus was set on schools categorized into three groups: 1) great public schools such as Eton, Winchester, Westminster, Charterhouse, St. Paul's, Merchant Taylors', Shrewsbury, Harrow and Rugby, 2) elevated grammar schools such as Tonbridge, Sherborne, and Uppingham, 3) new public schools including proprietary schools such as Cheltenham, Marlborough, Rossall, Radley, Lancing, Haileybury, and Clifton.

The consequences are summarized as follows. 1) Some of grammar schools became called as “principal schools”, “great schools”, or “seven schools” in the beginning of the nineteenth century, and the concept of “public school” was applicable to these schools. Increasing in number of new public schools during 1840 and 1880, the concept was broadened covering some of the elevated grammar schools and new public schools. The epoch of this change could be estimated 1860's. 2) Social backgrounds of boys in “great schools” in the late eighteenth century were mainly from aristocracy, gentry, profession, and military classes. In the mid of the nineteenth century, as a survey suggested, the great majority of boys were from gentry, landless-gentry, and new-risen middle classes. 3) Enrollment of boys in great public schools increased steadily since 1840, and by 1860's most of them became big schools, and the concept of “great public school” established. In the elevated grammar schools, enrollment of boys increased rapidly about late 1850's and 1860's. On the other hand, the trends of the enrollment in new public schools were varied. Most of them experienced rise and fall, as far as enrollment of boy is concerned. Whereas Cheltenham, Marlborough and Clifton increased in number of boys and became big schools, Rossall, Radley, and Lancing maintained their scale small. 4) In 1860, 33% of new residents of colleges in Oxford and 20% in Cambridge were occupied by boys from great public schools together with Cheltenham and Marlborough. In 1867, nine great public schools, Cheltenham and Marlborough occupied 36% of the undergraduates of Oxbridge.

These consequences from historical statistics suggest that the incipience of athleticism arose about 1840, and reached its zenith since 1860's.

Key-words: Athleticism, Public School, Elitist School, Enrollment of Boys.

1. はじめに

19世紀前葉にイギリスのパブリックスクールで萌芽したゲーム活動がアスレティズム (athleticism: 競技礼賛) へと成長し始めたのは、McIntoshによれば、1950年頃からのことであり、その頂点は19世紀から20世紀への世紀転換期とエドワード時代であったという。¹一方、Manganによれば、アスレティズムがその頂点に達したのは、McIntoshの指摘よりも幾分か早い1875年頃からのことであった。²彼らの指摘するアスレティズムの興隆時期が正しいとしても、その興隆がどのような状態のパブリックスクールにおいて生じたのか、またどのような成長の軌跡を辿ったのかは、必ずしも十分に明らかにされていない。彼らの説は、アスレティズム興隆期のパブリックスクールのより具体的な歴史調査から検証されねばならないのである。本研究はアスレティズム史研究の手始めとして、「パブリックスクール」の生徒数の変動とエリート校化への動向を歴史統計から明らかにすることによって、アスレティズムという競技精神の興隆と普及の時期を推測し、その画期を査定することを目的とする。しかし、アスレティズムの興隆の基盤としての生徒に注目し、その動向と数的動態をアスレティズム史研究という視点から歴史統計的に綿密に分析した研究は存在しない。従って、本研究は、アスレティズムのいわば「下部構造」としての生徒に注目し、アスレティズム興隆の時期区分を可能とする画期を明らかにしようとする最初の試みとなる。

本研究では、以下の4つの点からその画期を査定する。まず、第一に伝統的な基金立グラマースクールの設立動向を俯瞰し、従来から存在していたそれらの学校から幾つかの選ばれた「パブリックスクール」が差別化される動向を明らかにし、第二にパブリックスクールの生徒の出身階層を明らかにし、第三に入学者数の変動を明らかにし、第四に生徒の進路、特に大学への進学動向を明らかにする。こうした変動と動向を踏まえて、アスレティズム興隆の画期が仮説として提起される。勿論、こうした基礎的な歴史統計が、アスレティズム興隆との直接的な因果関係を明示するとは言い得ない。しかし、アスレティズム興隆期の生徒数、生徒の進路、生徒の出身階層の調査は、パブリックスクール各校の経営基盤の安定度

を示唆するだけでなく、アスレティズムの生徒への普及度を推し量る上で不可欠な母数、各校におけるアスレティズムの現象規模を推定するための基礎的データとなる。従って、本研究は、アスレティズム興隆の社会的、歴史的原因を明らかにすることを目的とするのではなく、今後のアスレティズム史研究のために、生徒数や進路に関する歴史統計を用いて、その基礎的知見、特にアスレティズム興隆の時期区分を可能にする画期を査定することにある。

本研究では、19世紀に差別化されてきたグレート・パブリックスクールと上昇グラマースクール、そしてそれらをモデルにして設立されてきた共同出資立学校を含めた新興パブリックスクール、という3つの型の学校に焦点を絞る。本研究では、グレート・パブリックスクールから寄宿制のWinchester (1382年設立)、Eton (1440年設立)、Shrewsbury (1552年設立)、Westminster (1560年設立)、Rugby (1567年設立)、Harrow (1572年設立)、Charterhouse (1611年設立)を、上昇グラマースクールからSherbone (1550年設立)、Tonbridge (1553年設立)、Uppingham (1584年設立)を、共同出資立学校を含めた新興のパブリックスクールからCheltenham (1841年設立)、Marlborough (1843年設立)、Rossal (1844年設立)、Radley (1847年設立)、Lancing (1848年設立)、Clifton (1862年設立)、Haileybury (1862年設立)を、パブリックスクールとアスレティズムの歴史的研究で比較的言及される頻度の高さという観点から選出した。

2. パブリックスクールの設立動向：エリート校「パブリックスクール」の出現

1868年のトントン委員会報告書にグラマースクールの設立年度別一覧表がある。³このリストには775校と22校の設立年度不明の学校が記載されている。トントン委員会の調査対象校がどのような年代に設立されたのかを知る上で貴重である。報告書は、歴代の国王在位年代順に対応して学校の設立を記載している。(表1、図1) この統計によれば、トントン委員会の調査した圧倒的多数のグラマースクールの起源は、18世紀以前であったことが分かる。1700年以前に設立された学校は624校で、設立年度の明らかな調査校の実に約80%に及ぶ。従って、その起源の古さ

表1. 歴代の王と基金立グラマースクール設立数

歴代の王と在位期間	学校数
William IIからEdward IVまで (1087-1485)	18
Henry VII (8/22,1485-4/21,1509)	17
Henry VIII (4/22,1509-1/28,1547)	63
Edward VI (1/28,1547-7/6,1553)	51
Mary. (July,1553-7/24,1554)	4
Philip and Mary.(7/25,1554-17/11,1558)	15
Elizabeth.(11/17,1558-3/24,1603)	137
James I. (3/24,1603-3/27,1627)	83
Charles I.(3/27,1625-1/30,1649)	59
Commonwealth,1/30,1649-5/29,1669)	43
Charles II.(5/29,1660-2/6,1685)	81
James II. (2/6,1685-12/11,1688)	19
William III. (2/13,1689-11/27,1694)	34
Anne.(3/8,1702-8/1,1714)	27
George I.(8/1,1714-6/11,1727)	34
George II.(6/11,1727-10/25,1760)	30
George III.(10/25,1760-1/29,1820)	30
George IV.(1/29,1820-6/26,1830)	3
William IV.(6/26,1830-6/20,1837)	4
Victoria.(6/20,1837-<1865>)	23
不明	22
合計	797

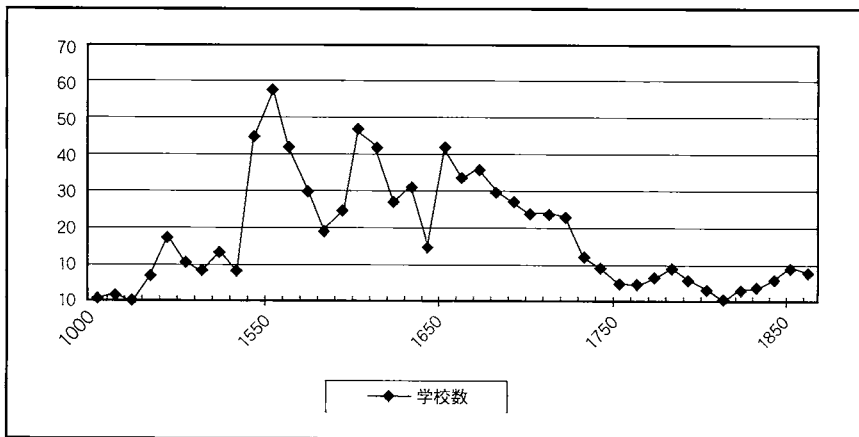


図1. 基金立グラマースクールの設立年度別グラフ
(トーントン委員会報告書より作表)

は、「パブリックスクール」という地位を他のグラマースクールから区別する排他的要因ではなかったと言ってよい。通念上、パブリックスクールの最古の学校とされる Winchester は8番目の位置にあり、Eton は14番目に位置づけられている。こうした設立動向をグラフにしたのが図1である。1000年から1865年までに設立されたグラマースクールを1000年から1500年までを100年間隔で、1500年から10年間隔で統計処理したものである。斎藤新治は「基金立文法学校は一四世紀末のイングランドに誕生し、一五世紀に徐々に

発達し第一六世紀三〇年代、国家の成立とともに政策に支持され、第一七世紀の前半に繁栄のピークに達し、内乱と王政復古を経過して縮小していく軌跡をえがいたイングランドに独自の性格をもった学校である。これを古い文法学校とすると、新しい学校は一八世紀末から息を吹き返しつつ第一九世紀の60年代以降パブリックスクールまたはグラマースクールとして確立した地位を占め、第二十世紀の八十年代の教育改革を経過してその伝統の存在があらためて注目されている学校を指す」⁴としているが、まさに、トーントン委員

会に言及されたグラマースクールの設立動向は、齋藤の前半の指摘と一致する。

一方、今日のインディペンデント・スクール年鑑でHMC (Head Masters' Conference) に加盟している所謂「パブリックスクール」の設立年度を調べると、大筋同じ傾向をとりつつも、19世紀半ば頃から新設のパブリックスクールが増加する傾向が見られる。⁵ (表2、図2) このことは、19世紀中葉頃から、中産階級の教育要求を背景にして、新旧グラマースクールが「パブリックスクール」としてのステータスを獲得しようとする競争時代が到来したことを示唆している。

しかし、イギリスの幾つかのグラマースクール

が、自らを差別化することによって固有の「パブリックスクール」概念を形成し、獲得したのはいつ頃のことであろうか。パブリックスクールは一般的に、①富裕な顧客を入れる階級的な学校、②費用のかかる学校、③地方的でない学校、④大部分が寄宿制である、⑤国や地方の教育当局から独立しているが、個人が所有したり利益のために営まれるものではない、というOgilvieの定義によって説明される。⁶しかし、Bamfordは、19世紀初期に①セヴン・スクールズと呼べる学校 (Charterhouse, Eton, Harrow, Rugby, Shrewsbury, Westminster, Winchester)、②ノン・アングリカンの学校(非国教徒のグラマースクール)、③Christ's

表2. HMC加盟パブリックスクールの設立動向
(1100-1980)

設立年度	学校数	設立年度	学校数	設立年度	学校数
1100	1	1640	3	1820	4
1200	1	1650	1	1830	6
1300	3	1660	2	1840	17
1400	6	1670	1	1850	14
1500	2	1680	0	1860	19
1510	5	1690	1	1870	9
1520	1	1700	1	1880	12
1530	2	1710	1	1890	5
1540	13	1720	3	1900	3
1550	20	1730	0	1910	4
1560	11	1740	2	1920	5
1570	2	1750	0	1930	5
1580	3	1760	0	1940	0
1590	6	1770	0	1950	1
1600	4	1780	1	1960	0
1610	5	1790	2	1970	1
1620	4	1800	2	1980	2
1630	2	1810	6	合計	224

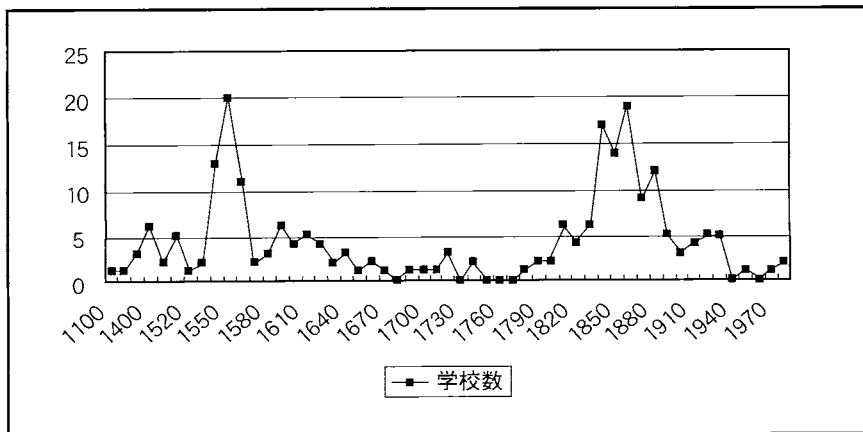


図2. HMC加盟パブリックスクールの設立動向
(1100-1980)

Hospital(主として貧しい者のためのグラマースクール)が存在していたとし、このうちの第一の系譜から「パブリックスクール」という通念が派生したとしている。⁷この指摘は、大筋、Ackermanによって1816年に出版された学校史の指摘と符合する。そこでは、Winchester, Eton, Westminster, Charterhouse, St.Paul's, Merchant Taylors', Harrow, Rugby, Christ's Hospitalの9校が扱われている。⁸ここではShrewsburyを除く「セヴン・スクール」が、通学制のSt. Paul'sやMerchant Taylors'、そしてChrist's Hospitalを含めて、「Great Schools」、「Principal Schools」や「Public Schools」と呼ばれていたことが分かる。よく知られているように、1861年にクラレンドン委員会はWinchester, Eton, Westminster, Charterhouse, St.Paul's, Merchant Taylors', Harrow, Rugby, Shrewsburyという9校の教育を調査した。⁹その報告書(1864)以後、「パブリックスクール」は、クラレンドン委員会が調査したようなある特定のグレート・スクールを意味する用語として理解され始め、他の「グラマースクール」から差異化する用語として通念化したといつてよいであろう。このように、19世紀前葉頃から幾つかのグラマースクールが他のグラマースクールから差別化され始め、次第にグレート・スクールとしての「パブリックスクール」というステータスと概念を形成したと考えてよいであろう。

一方、19世紀になると、古典主義的なグラマースクールは、ギリシア語とラテン語の教授という伝統的な性格を維持しつつ、新興中産階級の教育要求(自然科学、現代外国語、地理・歴史等)を吸収し、帝国主義的拡張の中で新たなエリート養成機関を確立しようと模索し始めた。哲学的急進派や非国教派アカデミーの世俗的、实际的、科学的教育の要求は、エディンバラレビュー誌等の古典主義教育批判のキャンペーンとして展開されたが、それらの教育要求の一部はTonbridgeのV. Konx, Shrewsbury校のS. Butler, RugbyのT. Arnold等によって、新たな「パブリックスクール」の教育内容に統合され始めた。¹⁰いくつかの伝統的なグラマースクールは、哲学的急進派の功利主義的教育批判、非国教派の英国国教会批判を換骨奪胎して、19世紀型の「パブリックスクール」を創出し始めたのであった。この過程は、支配階級の教育が、かつての主流的な教育形態である家庭教育

から、次第により「公的」な側面を含む「学校」教育へと移行し始めたことをも示している。つまり、寄宿制パブリックスクールは親の代行として家庭教育の機能を再構成すると同時に、より社会的な道徳基準と教養、大英帝国の指導者というイギリスのナショナルな要求に沿って生徒の資質を養成する、「公」教育の機関としての性格を形成して行くのである。

しかし、こうした教育要求の変化に即座に対応できたのは、新興パブリックスクールであった。1830年代頃から新設されてくるパブリックスクールの急増は、国教派、非国教派を問わず、こうした点での信頼を上昇志向の新興中産階級から獲得したことを示している。1830年代6校、1840年代17校、1850年代14校、1860年代19校、1870年代9校、1880年代12校というように、今日のHMCに加盟しているパブリックスクールの34%に当る77校が1830年代から1880年代にかけて設立されたのである。本研究で扱うCheltenham(1841)、Marlborough(1843)、Rossall(1844)、Lancing(1848)、Clifton(1862)、Haileybury(1862)という有名校は、そうした部類の「グレート・スクール」を模倣した新興パブリックスクールであった。1864年には、クラレンドン委員会報告書において、CheltenhamとMarlboroughの教育は、グレート・スクール、即ち「パブリックスクール」の教育に匹敵するものと評価されるまでになった。しかし、次第に評価を高めたそれらの新興パブリックスクールが「パブリックスクール」として認知されるのは、Uppinghamの校長Edward Thiringの提唱によって1869年に結成された「校長協議会」(Headmaster's Conference)を契機としてであった。1860年代には、「パブリックスクール」は狭義の「セヴン・スクール」やクラレンドン委員会の扱った9校の「グレート・スクール」という範囲を越えて、新興パブリックスクールにまで拡大されはじめたのであった。それは、イギリス中等教育におけるエリート教育をめぐる競争の激化と序列化の始まりでもあった。

3. パブリックスクールの生徒の出身階層

19世紀の「パブリックスクール」概念の変化と生徒の動向とに、どのような相関がみられるのであろうか。19世紀初頭、「パブリックスクール」は未だ試練の時であった。歴史的重要性は明らかに

十分でなく、両親も学校を信用していなかった¹¹と言われる。1768年、1798年、1818年にEtonで学生の叛乱が、1774年、1778年、1793年、1818年にはWinchesterで、1797年と1822年にはRugbyで、1818年にはHarrowで学生の暴動が生じた。¹²産業革命、フランス革命の余波、階級闘争の激化、時代は明らかに変革と騒擾の兆候を示していた。親は学校よりも家庭教育に信頼を置いていた。18世紀における出身階層別の教育種別は、Nicholas Hansの研究によって明らかにされているが、それによると貴族階級は、多くの場合、グレート・パブリックスクールに自分の息子を送り込んでいるが、グラマースクールに息子を委ねることは殆どなかったと言えよう。しかし、郷紳・ジェントリー階級はグレート・パブリックスクールや家庭教育によって息子達を教育する傾向が強く、更に「プロフェッション」と呼ばれる職業に就く牧師や医師や法律家の子息の教育はグレート・

パブリックスクール、グラマースクール、家庭教育の三つの教育種別にはほぼ三分されている。¹³(表3、図3)

貴族、郷紳・ジェントリー、プロフェSSIONALズ(知識階級)、軍人・官吏を18世紀の支配階級として捉えると、彼らの教育は、グレート・パブリックスクールに彼らの約33%が、次いで家庭教育に約27%が、グラマースクールに22%が依存していた。この統計数値は、Bamfordの、親たちが「学校を信用していなかった」という指摘に微妙な解釈の余地をもたらす。というのも、支配階級の子弟教育の約55%がグレート・パブリックスクールやグラマースクールに依存していたことになるからである。しかし、ここで調査された各階級の人数が、その階級全体の人口のどの程度の割合なのか不明であることから、Bamfordの指摘を間違いとして退けることはできない。いずれにせよ、19世紀になると、こうした支配階級の

表3. 18世紀における生徒の出身階層

階級 / 教育形態	グレート・パブリックスクール	グラマースクール	非国教派アカデミー	私営学校	家庭で教育	合計
貴族	109	3	0	8	40	160
郷紳・ジェントリー	198	95	11	50	199	553
専門職(牧師, 医師, 法律家等)	223	191	75	70	191	750
軍人, 官吏, 商人	111	132	52	73	76	444
自作農, 職人, 小売商人, 工場農場助入	29	89	40	63	87	308
合計	670	510	178	264	593	2215

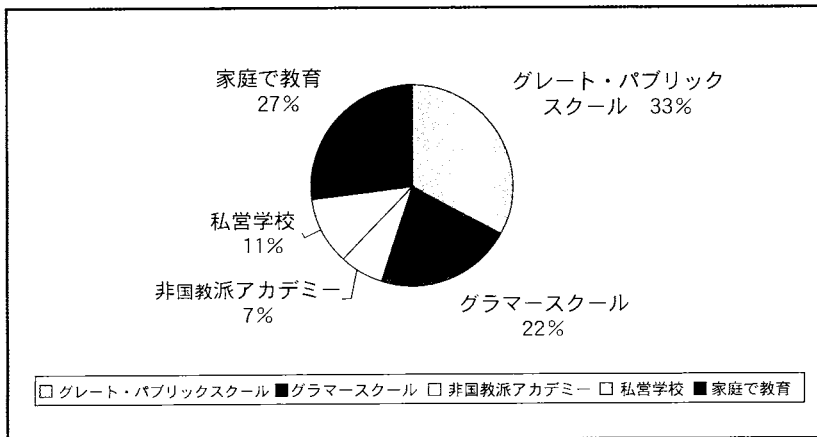


図3. 18世紀支配階級の教育形態

教育は、家庭教育から次第にパブリックスクールやグラマースクールに移行したと考えられ、同時に、グラマースクールの「パブリックスクール」化を導き始めたと考えられる。

1841年から1850年にかけてのグレート・パブリックスクール7校の生徒の出身階層を見ると、ジェントリー階級が最も大きな数を占めている。(表4、図4) 19世紀になると、はっきりとジェントリー階級が、家庭教育よりも子息の教育機関として Eton, Winchester, Rugby, Harrow, Westminster, Charterhouse, Shrewsbury というグレート・スクールに注目し始めたと言ってよいであろう。こうした動向はパブリックスクールが、新興の中産階級(土地を持たないジェントリー)を含む、より広範囲な支配階級の教育要求に応じた教育機関として確立し始めたことを示していると言えよう。¹⁴

1850年以後におけるパブリックスクールにおける生徒の階層別統計は今後の課題として残されているが、トーントン委員会報告書に載せられて

いる戸籍吏の W. Farr の言及は、イングランドにおける中産階級と上流階級の人口を明らかにしている点で注目し得る。¹⁵ それによれば、1861年におけるイングランドの中産階級と上流階級に所属する5歳から20歳までの男子数は、同年代男子全人口の約14%であった。(表-5) 1864年当時の中産階級と上流階級に所属するイングランドの10歳から15歳の男子は161,194人で、15歳から20歳の男子は150,262人であると推測している。これは、各年齢層に約3万人の中産階級と上流階級の男子がいたことを示している。このことは、その多くが「パブリックスクール」やグラマースクールに進学する傾向を強めていたことを勘案するとき、約3万人の入学者をめぐって、グレート・パブリックスクール、上昇グラマースクール、新興パブリックスクールに差異化された学校間での競争が激化する一方で、「パブリックスクール」概念が学校間較差を越えて拡大し、汎化し始めたことを示唆していると言えよう。

表4. 19世紀グレート・パブリックスクール7校生徒の出身階層

有爵貴族	689
地主ジェントリー	2321
土地を持たないジェントリー	1212
聖職	703
専門職	207
軍人	288
企業・農業	54
合計	5474

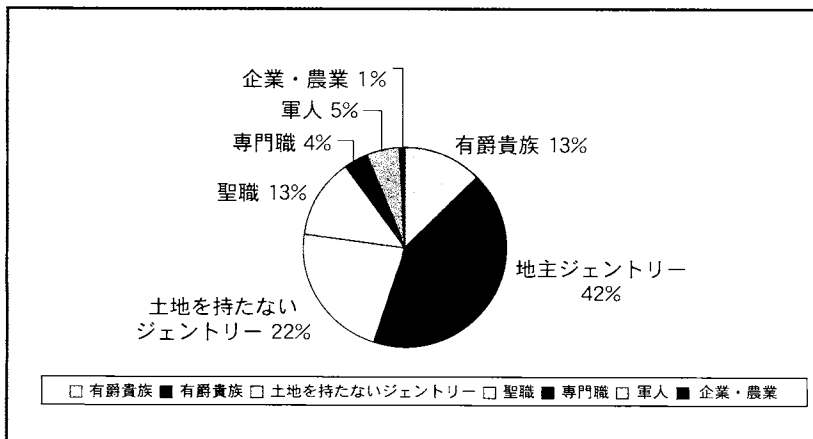


図4. 19世紀グレート・パブリックスクール7校の出身階層

表5. イングランドにおける中産階級、上流階級の児童数

年	階級・男女／年齢	5-10歳	10-15歳	15-20歳	合計
1861	上流階級・中産階級男子	163,104	147,381	133,203	443,688
	全階級男子	1,172,960	1,059,889	957,930	3,190,779
	上流階級・中産階級女子	162,846	145,351	135,537	443,734
	全階級女子	1,171,106	1,045,287	974,712	3,191,105
	上流階級・中産階級男女	325,950	292,732	268,740	887,422
1864	全階級男女	2,344,066	2,105,176	1,932,642	6,381,884
	上流階級・中産階級男子	178,121	161,194	150,262	443,688
	上流階級・中産階級女子	177,874	158,763	148,044	484,681
	上流階級・中産階級男女	355,995	319,957	298,306	974,258

4. 生徒数と入学者数の変動

アスレティズムが成長を遂げた19世紀にパブリックスクールの生徒数はどのように変化したのであろうか。アスレティズムが一種のパブリックスクール精神となったということは、この時期に長期的なスパンで生徒数が増加したことを予測させる。しかし、それはいつ頃から、どのような増加の仕方をしたのであろうか。クラレンドン委員会に7校の調査対象校が回答した1840年から1861年までの生徒数をまとめたのが表6と図5である。¹⁶

Etonは1840年代に600名規模から700名規模になり、1859年には800名規模に増加している。Winchesterは1840年代に130から140名規模であったが、40年代末頃から100名を割る減少傾向に転じて、1860年頃に130名を回復する。Westminsterは1840年代前半には80名規模の学校であったが、40年代末には130名規模の学校に成長した。Charterhouseは減少の傾向を辿った。1840年初期の130名規模の学校であったが、40年代半ばに180～190名規模に伸びたが、50年代頃から減少に転じ、60年頃には120名規模の学校になっている。一方、Harrowは急成長を遂げた。1840年代半ばまで100名前後の規模であったが、1847年以後300名を越える規模となり、1853年には400名を越え、1860年頃には500名規模の学校を展望できるようになっていた。Rugbyは、1841年から1860年にかけて、幾分か浮沈を経験するが、500名弱、460名以上の規模を維持できる比較的安定した学校であった。寄宿制をとらない通学制のMerchant Taylors'も、常時260名規模の学校として定着していた。Eton, Harrow, Westminsterの生徒数ははっきりと増加を示したが、Charterhouseを除く他の学校は微増の傾向を示している。しかし、各校における生徒数の増加時期に注目する

と、Etonは1843年から1848年頃までと、1857年から1861年にかけて、Winchesterは1840年から1846年にかけて、Westminsterは1848年以後、Charterhouseは1843年から1854年頃にかけて、Harrowは1846年以後、Rugbyは1842年から1854年頃までと1859年以後となっている。全ての学校で1840年代に増加期を経験している。このことは、1840年代に「グレート・スクール」がそのステータスを確立したことを示唆する。また、幾つかの学校でみられる1860年頃からの増加傾向は、グレート・スクールの大規模校化を示唆している。

1840年から1860年にかけて見られた生徒数の増加は、基金立のグラマースクールで「collegers」とか「scholars」と呼ばれた各校の定款で定められていた給費生(foundationers)の数を、「oppidans」とか「townboys」と呼ばれた自費生(commoners)が凌駕し始めたことを意味する。つまり、貧しい生徒を全国から集め、基金という「慈善の使用」によって教育しようとした基金立グラマースクールの基本的機能を変質し始めたことを示している。実際、クラレンドン委員会の調査の目的の一つは、こうした変質を9つのパブリックスクールの基本財産の運用から明らかにし、それぞれの基金の意図を確認させ、現状に即した定款を定めるよう指導する点にあった。1860年代以後、自費生の増大はこうして公認され、「パブリックスクール」は「死手保守」としての基金を運用する慈善的な教育機関と、営利を基礎とする高額の教育機関としての二面性をはっきりと備えて行くのである。¹⁷

一つの例として、Etonの生徒数の変化を、もっと長期的な統計から確認してみよう。(図6)生徒数の変化を1791年から1898年の間を約3年おきにみると、18世紀には400名前後であったものが1810年代以降に約600名に、1850年代には800

名前後に、1870年代には1000名へと、ほぼ右肩上がりで生徒数が増加しているのが理解できる。¹⁸ Eton の場合は恒常的な生徒数の増加を19世紀全体にわたって示しているが、その過程は、「慈善の使用」という貧しい生徒への教育から、はっきりと裕福な支配階級のための教育機関、即ち最も典型的で先導的な19世紀的「グレート・パブリックスクール」への変質を意味していたと言えよう。

一方、Eton以外のグレート・パブリックスクールの生徒数の動向はどのようなものであったのだろうか。資料の関係上、年度毎の生徒数は分からないが、1836年から1900年までのWinchester, Shrewsbury, Charterhouse, Rugbyにおける入学者数の年度別変化を集計してみると、多少の増減を繰り返しつつも、1830年代と1840年代の入学者数を1900年までに大幅に増やしている。¹⁹ (表7、図

表6. グレート・パブリックスクールの生徒数の変動(1840-1861)
(クラレンドン委員会報告書より)

年/学校	Eton	Winchester	Westminster	Charterhouse	Merchant Tylors'	Harrow	Rugby
1840	593	130		134			
1841	635	127		135			362
1842	660	129	85	138	259	114	400
1843	716	134	77	156	260	90	438
1844	741	140	85	173	260	79	468
1845	760	145	85	192	259	117	476
1846	777	148	95	186	266	221	478
1847	709	112	104	185	266	314	491
1848	653	107	124	176	258	342	480
1849	645	101	137	167	267	361	463
1850	625	86	136	165	260	381	461
1851	644	84	132	157	275	389	466
1852	597	84	138	176	264	392	464
1853	613	78	137	178	263	413	414
1854	602	84	141	162	258	416	412
1855	616	73	133	133	247	431	346
1856	666	68	125	127	257	425	325
1857	744	77	129	125	262	440	316
1858	758	90	140	126	265	478	365
1859	801	96	131	123	265	488	462
1860	818	116	123	123	264	490	464
1861	829	131	136	125	262	499	467

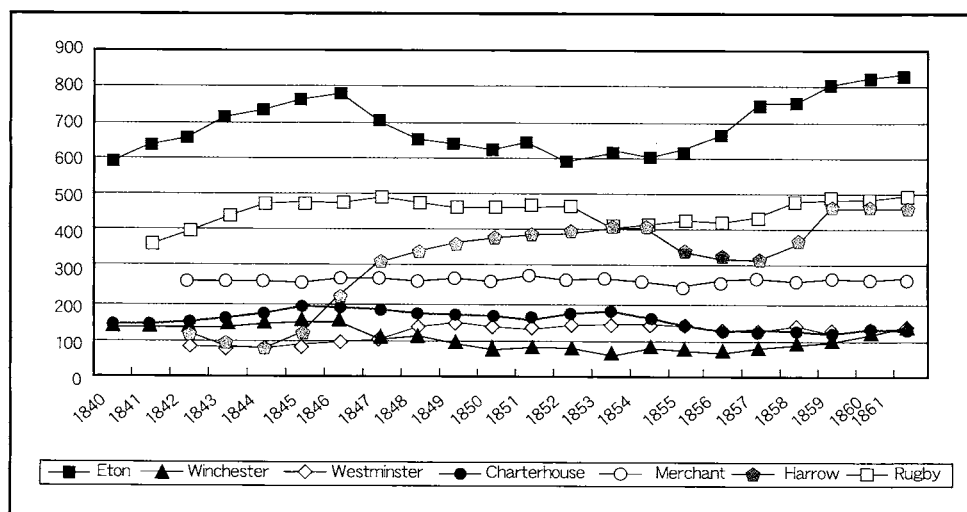


図5. グレート・パブリックスクールの生徒数の変動 1840-1861
クラレンドン委員会報告書

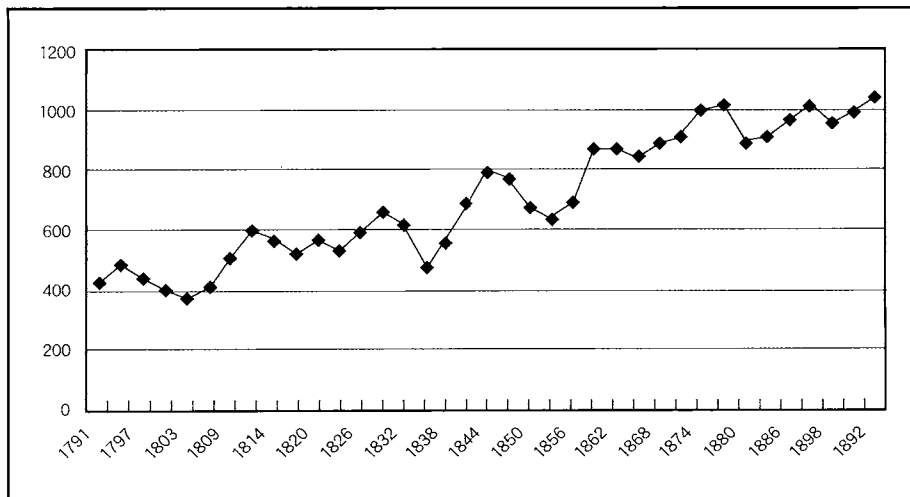


図6. ETON生徒数の変化 1791-1898

表7. グレート・パブリックスクール入学者数の変動 1840-1900

年	①	②	③	④	年	①	②	③	④
1840	62		26	121	1871	87	59	43	117
41	55		40	124	72	107	57	76	101
42	59		44	145	73	95	52	123	72
43	63		47	158	74	98	55	166	130
44	73		48	172	75	101	67	162	153
45	72	42	36	145	76	90	46	150	142
46	53	23	34	149	77	99	51	120	150
47	29	20	32	140	78	110	55	137	124
48	39	25	39	144	79	92	56	132	136
49	39	28	42	129	80	95	62	140	115
50	35	25	30	148	81	102	53	138	129
51	39	27	38	148	82	101	63	144	124
52	39	31	43	121	83	93	80	144	135
53	28	27	45	111	84	108	85	153	109
54	41	34	29	95	85	89	75	160	100
55	35	32	17	90	86	105	68	169	116
56	38	35	29	82	87	104	65	189	128
57	59	41	31	95	88	106	88	142	137
58	42	30	26	147	89	107	107	126	138
59	47	40	27	186	90	96	94	180	140
60	59	33	26	143	91	92	81	130	160
61	65	55	22	130	92	107	87	143	
62	63	50	34	142	93	100	104	144	
63	54	65	35	171	94	98	82	157	
64	71	62	42	160	95	90	88	145	
65	73	52	35	161	96	101	85	152	
66	93	38	28	156	97	95	93	132	
67	64	65	36	160	98	90	84	175	
68	88	55	36	159	99	92	95	146	
69	116	54	31	135	1900	107	94	164	
70	100	61	35	146					

①Winchester ②Shrewsbury ③Charterhouse ④Rugby

7) Winchesterは当初60名前後の入学者数であったが、1864年からは70名以上となり、1869年からは90名から100名規模の入学者数になった。

Shrewsburyは1845年から60年まで20名から40名の入学者数であったが、1861年以後、50名から60名の入学者数となり、1884年からは80名か

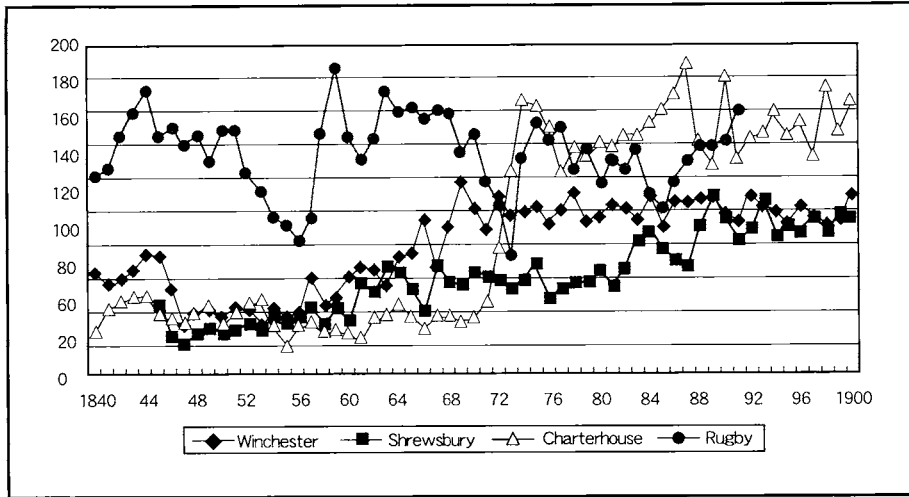


図7. グレート・パブリックスクール入学者数の変動
1840-1900

ら100名の入学者数に増えた。Charterhouseは1872年にロンドンからサリーへ移転したことから一挙に大規模校化した。当初30名から40名の入学者数であったものが、1873年以後、140名から160名の入学者を受け入れる学校に変化した。Rugbyは1830年代80名の入学者数を前後したが、39年以後、幾分かの浮沈を繰り返した後、110名から170名の生徒を集める学校となった。1838年の80名の入学者数は、1891年に2倍の160名に達した。図7からも読み取れるように、1860年代から70年代頃を境として、いずれの学校も1830年代の入学者数を越える生徒を安定的に確保していることが分かる。既にクラレンドン委員会報告書の1840年から1860年におけるグレート・パブリックスクール9校の生徒数の増加が1840年代頃から始まっていたことを指摘したが、ここで調査した4校の入学者数の変動は、1840年代の増加傾向が1850年代に低迷し、再び1860年頃から増加基調に転じたことを示している。このことは、各校が設立当初の定款を改定し、自費生の定員を増加させたことと関係していると考えられる。また、各校の生徒数は入学者数の数倍存在することから、こうした生徒数の増大は、明らかに19世紀初期のパブリックスクールのイメージを一変させる規模の「グレート・パブリックスクール」の出現をもたらしたと言ってもよいだろう。アスレティズム興隆期の寮、教室、学校施設、運動場等の

整備と拡充は、こうした生徒数の増大と密接に関連していたと考えられる。

こうしたグレート・パブリックスクールに追随しようとして19世紀に成長を遂げた古い基金立の上昇グラマースクールと新興のパブリックスクールでは、入学者数の変動にどのような傾向があるのだろうか。最初に、「パブリックスクール」へと脱皮を遂げようとして上昇を試みた古い基金を持つ学校に注目してみよう。ここでは、1553年設立のTonbridge、1555年設立のSherborne、1584年設立のUppinghamの3校における1840年から1900年の入学者数の変化に注目する。²⁰ (表8、図8) Sherborneは、1862年頃から50名の入学者を越え、1883年には90名を越えて100名の入学者を展望できる状態に至るが、次第にその伸びを減少させている。これに対して、典型的な上昇グラマースクール (elevated grammar school) としてよく言及されるUppinghamとTonbridgeは急成長を示している。共に60年代頃から50名の入学者を集める安定的な学校となり始め、Uppinghamは、Eton出身のEdward Thring校長(1853～1887年まで校長職)の下で、約100名前後の入学生を集める中規模の先進的な「パブリックスクール」へと変身を遂げたのであった。彼はこうした自信のもとに、他の学校の校長たちに働きかけ、1869年に13校の校長によって構成される校長評議会を結成したことは間違いない。この評議会の結成は、

表8. 上昇グラマースクールの入学者数の変化 1840-1900

年	①	②	③	年	①	②	③	年	①	②	③
1840	12	43	43	1860	52	26	54	1880	45	74	96
41	15	39	25	61	30	32	60	81	47	80	95
42	13	32	21	62	34	54	67	82	69	86	96
43	32	35	13	63	46	61	103	83	62	93	103
44	70	28	7	64	55	60	71	84	47	92	100
45	52	16	8	65	52	68	106	85	60	87	90
46	45	29	22	66	41	68	95	86	45	71	102
47	36	28	15	67	65	60	87	87	58	79	89
48	40	21	23	68	47	54	83	88	39	72	94
49	39	11	15	69	64	84	83	89	47	43	93
50	35	45	19	70	67	74	95	90	101	23	118
51	30	36	17	71	79	70	97	91	131	35	97
52	34	23	17	72	78	65	89	92	101	42	115
53	32	28	12	73	69	64	118	93	123	56	104
54	32	32	18	74	66	71	73	94	124	54	109
55	27	18	23	75	77	75	74	95	114	47	112
56	50	36	20	76	71	80	82	96	126	49	122
57	50	31	37	77	59	71	83	97	106	50	117
58	52	38	58	78	73	75	99	98	103	46	115
59	50	26	50	79	65	70	86	99	121	59	129
								1900	95		153

①Tonbridge ②Sherborne ③Uppingham

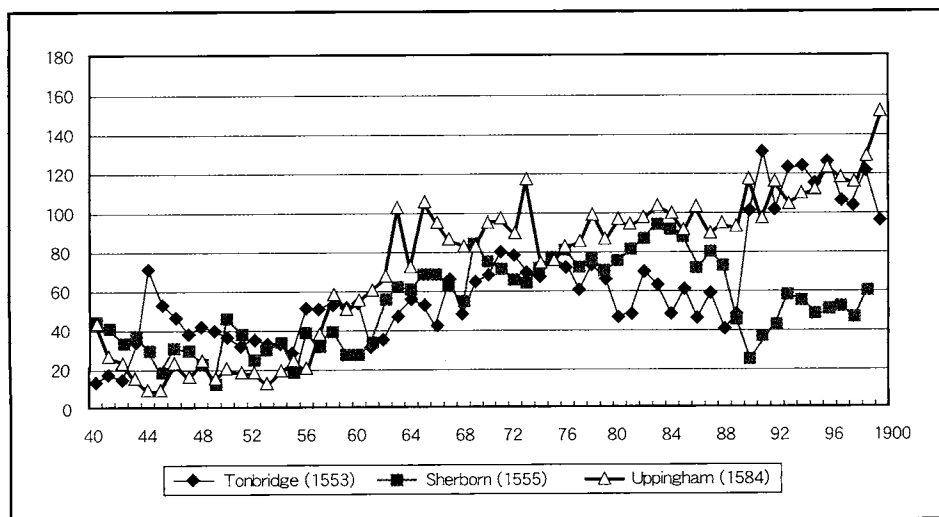


図8. 上昇グラマースクールの入学生数の変化 1840-1900

「パブリックスクール」というステータスの汎化を示す象徴的な出来事でもあった。以後、この評議会への加盟が「パブリックスクール」の品質証明となり始める。40年代には10名規模の入学生しか募集できなかったTonbridgeも、50年代には50名規模の学校となり、60年代から70年代に60名から70名規模に、1890年からは常時100名以上を募集する中規模校へと転身したのであった。上昇グラマースクールの「上昇」は、1850年代後

半から1860年頃に始まっており、1880年までに安定した中規模の「パブリックスクール」に成長していたといつてよいであろう。

一方、新興パブリックスクールの入学者数の変化を、Cheltenham, Marlborough, Rossall, Radley, Lancing, Haileybury, Cliftonの事例から見てみよう。²¹ (表9、図9) Cheltenhamは、設立時の1841年に145名の入学者から出発し、早くも56年には203名へと飛躍した。以後、1870年

表9. 新興パブリックスクールの入学者数の変動 1841-1900

年	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	年	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
1841	145							1871	211	130	81	25	39	92	139
42	136							72	199	175	82	23	35	79	154
43	120	203						73	187	152	68	37	46	116	177
44	95	41	79					74	192	144	63	26	32	88	198
45	86	49	117					75	169	155	75	48	35	105	178
46	123	161						76	186	154	74	37	41	106	165
47	101	68		3				77	180	159	86	37	46	99	192
48	104	167		33	30			78	194	152	79	17	44	97	196
49	126	102		43	28			79	175	158	71	19	37	129	186
50	120	75		31	47			80	164	146	87	35	50	174	154
51	152	85	79	11	30			81	187	143	95	33	56	132	152
52	156	66	78	19	30			82	191	166	94	32	52	127	194
53	151	87	79	19	19			83	177	159	97	45	62	129	167
54	194	75	67	46	26			84	144	171	90	35	58	126	159
55	187	101	63	39	23			85	164	153	96	48	43	139	156
56	203	104	57	40	17			86	133	161	89	44	51	133	160
57	179	134	79	30	36			87	114	143	69	42	36	127	152
58	167	127	72	29	17			88	123	171	73	46	60	112	174
59	192	128	121	38	23			89	164	153	114	41	34	68	142
60	189	126	113	28	16			90	164	155	124	42	44	119	173
61	184	140	133	28	27			91	166	146	109	49	40	166	153
62	193	147	83	22	25	57	76	92	163	151	94	40	18	169	151
63	236	125	103	39	29	134	150	93	159	166	110	48	36	149	139
64	225	146	100	26	43	94	87	94	150	153	84	54	34	130	133
65	199	142	113	31	29	93	73	95	161	143	83	34	46	127	158
66	194	134	100	28	37	86	93	96	165	140	81	39	18	134	144
67	209	123	98	20	27	89	115	97	195	138	85	35	18	124	144
68	182	157	80	28	36	105	104	98	172	156	82	52	38	124	128
69	186	153	86	26	28	89	114	99	171	172	100	57	27	114	147
70	190	88	80	17	27	94	140	1900	148	155	127	55	28	133	148

① Cheltenham, ②Marlborough, ③Rossall, ④Radley, ⑤Lancing, ⑥Haileybury, ⑦Clifton

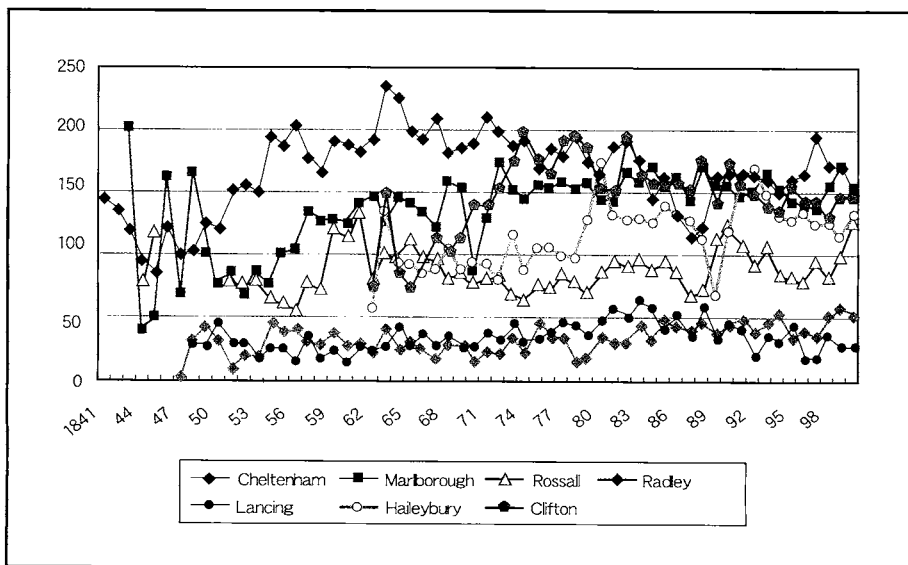


図9. 新興パブリックスクールの入学者数の変動 1841-1900

代まで200名前後の入学者を受け入れる大規模校となったが、80年代からは平均160名前後に下降した。Marlboroughは、203名の入学者をもって1843年に開校したが、その後、46年と48年に160名を越える入学者を獲得したものの、1854年まで100名を割る傾向が続いた。1855年頃から回復基調となり、130名から170名の入学者を維持する安定した大規模校となった。1844年設立のRossallはその年に79名、翌年に117名の新入生を受け入れた。1846年から50年までの年間毎の入学者数は名簿の不備から明らかにできないが、この間に215名が入学した。1859年には121名、61年には133名を達成したが、67年頃から88年頃には70名から90名を前後する入学者数に減少した。1889年からは幾分か浮沈をともなったが、平均して100名規模の入学者を維持するようになった。1847年に設立されたRadleyは、その当初から80年代初期まで、平均30名前後の入学者を受け入れる小規模校であった。1883年頃から40名を越えることが増え、94年頃から50名強の入学者の期待できる学校となった。1848年設立のLancingは小規模校であり続けた。アングロ・カソリックのWoodard系列の最初の学校であったが、英国国教会の傍流であることが入学者の数に反映していると考えられる。30名の入学者をもって創設され、基本的にその規模は1880年頃まで維持された。その後88年まで50名から60名の入学者を迎え入れたが、それ以後1900年まで、再び30名を割ることもある状態に戻った。1862年設立のHaileyburyは、設立の翌年に134名の入学者を獲得したが、その後72年頃まで、平均90名前後の新入生を受け入れる学校であった。その後1900年まで、1880年の174人、92年の169人を最大として、平均130名前後の入学者を維持している。同じ年に設立されたCliftonは、翌年の1863年に150名の入学者を迎えた。以後、100名から140名規模の入学者であったが、1872年以後、150名から200名弱の新入生を受け入れる大規模校になった。しかし、1883年頃から次第に入学者が減少し、1900年まで130名から160名規模の入学者数となった。新興パブリックスクールの入学者数の動態は、全体の学校が必ずしも増加に向かったとはいえない。その殆どが設立当初の入学者数を前後する、浮沈を伴う変化を示している。今回調査した学校で、19世紀末までに、入学

者数を急増させたものはない。生徒の獲得によって示される新興パブリックスクールの経営の安定は、19世紀を通じて、想像以上に困難であったと思われる。また、「パブリックスクール」のステータスをめぐる競争も学校間において熾烈なものであったことを推測させる。

グレート・パブリックスクール、上昇グラマースクール、新興パブリックスクールにおけるこうした生徒数、及び入学者の全般的な傾向は、生徒の獲得競争が激化したことを推測させる。全てのこれらの学校は、「グレート・パブリックスクール」モデルであり、同質的な学校を志向していたからである。上昇パブリックスクールや新興パブリックスクールで生徒数の伸びが見られ始めるのは、多くの場合1850年代から60年代頃からのことであった。そして、こうした時代に、いわゆる19世紀的な「パブリックスクール」という概念が汎化し始め、そのステータスが確立したのであった。しかし、こうした19世紀的「パブリックスクール」のステータスは、学校の規模や生徒数に還元できるものではなかった。次にそうした排他的なステータスをもたらした、もう一つの要因、生徒の進路と進学について検討しよう。

5. 生徒の進路と進学：エリートの創出

新興中産階級の台頭した19世紀に「パブリックスクール」のステータスを決定付けた重要な要因として生徒の進路があった。Bamfordが指摘するように、「一つの学校は、微小ではあっても、全国的な教育制度の本質的部分として見なされてもよい。こうした制約の範囲で、パブリックスクールはヴィクトリア時代の特定の社会階層を満足させるために出現したのである。学校は有能な人材を養成することによって、また当該の学校の影響が全生涯に及び、その生徒の経歴が成功あるいは失敗を導く、という憶測によって判断された。パブリックスクールの名声は、特にリーダーシップや政府にふさわしい人々を創出するというその憶測的な能力に依拠していた」²²といえる。「パブリックスクール」という新たな意味の形成は、実際、こうしたエリート創出をめぐる一種の「神話」の誕生と関連していた。エリートの創出の可能性に応じて、学校の社会的名声の序列は決定付けられた。RugbyとHarrowの生徒が最初についた仕事を調査したものがあつた。(表10) それによ

表10. ラグビー校、ハロー校生徒の卒業後の進路 1830~1880

年	軍	教会	法曹	行政政治学者	企業	海外	医師	科学技術	他の職業	夭折	不明	
Rugby												
1830	9	28	13	12	3	3	3	1	0	0	1	40
1835	11	19	9	8	0	0	0	1	0	0	4	21
1840	21	22	9	11	4	5	3	0	1	0	4	39
1845	35	19	12	23	2	4	7	5	0	1	3	32
1850	38	15	15	16	5	5	9	2	0	4	10	28
1855	20	9	16	9	4	5	6	1	0	0	2	18
1860	26	16	27	7	5	9	14	2	3	3	3	28
1865	19	13	26	13	10	18	17	4	3	2	2	34
1870	18	11	19	8	2	34	11	3	4	5	5	21
1875	15	7	24	8	5	30	23	5	5	12	2	18
1880	8	5	22	5	6	26	11	7	6	2	3	13
Harrow												
1830	14	8	11	8	0	4	0	0	0	1	3	26
1835	7	6	3	10	0	2	1	0	0	0	0	8
1840	4	3	2	3	2	2	3	0	0	1	0	11
1845	14	9	10	16	2	6	2	0	1	2	4	9
1850	36	12	14	22	1	8	1	2	0	3	7	16
1855	42	13	25	23	1	9	3	0	1	0	0	22
1860	39	9	19	26	1	8	9	2	4	2	10	33
1865	26	9	13	19	1	24	16	1	2	4	5	38
1870	37	5	21	22	5	24	12	1	2	7	6	27
1875	32	9	22	21	2	23	13	3	1	9	1	23
1880	33	4	18	5	8	21	11	2	3	3	4	53
両校の合計												
1830	23	36	24	20	3	7	3	1	0	1	4	66
1835	18	25	12	19	0	2	1	1	0	0	4	29
1840	25	25	11	15	6	7	6	0	1	1	4	50
1845	49	28	22	43	4	11	9	5	1	3	7	41
1850	74	27	29	39	6	13	10	4	0	7	17	44
1855	62	22	41	32	5	14	9	1	1	0	2	40
1860	65	25	46	33	6	17	23	4	7	5	13	61
1865	45	22	39	33	11	42	33	5	5	6	7	72
1870	55	16	40	30	7	58	23	4	6	12	11	48
1875	47	16	46	29	7	53	36	8	6	21	3	41
1880	41	9	40	10	14	47	22	9	9	5	7	66

れば、Rugbyの卒業生は1830年代から40年頃まで教会や聖職関係の仕事、軍隊、官吏や行政や政治家等を志望する者が多かったが、40年代以後、軍隊や法曹関係に進む者が増え、60年代には植民地や海外に雄飛する者、1870年以後には企業関係への進出者が富に増加している。Harrowの場合、Rugbyと異なり、聖職に進む者は一貫して少ないが、1850年以降、軍人、法曹人、行政官や政治家を多く輩出しており、1865年以後になると、やはり企業関係に進む者を増加させている。両校を併せてみると、1830年から1880年にかけて一貫して、軍隊、聖職、法曹界、行政・政治といった領域に数多くの人材を輩出し、1860年代頃から次第に企業関係や植民地や海外での事業に就く者たちが増えている。²³ こうした傾向は、パブリックスクールが、支配階級の職業領域に、極めて多くの人々を送り出していることを示してい

る。そして、こうした支配階級のルートの確立こそが、いわゆる19世紀の「パブリックスクール」の概念を形成した最も大きな要因であったと言える。

しかし、どのような学校が「パブリックスクール」の19世紀的概念の形成を先導したのであろうか。この点を大学進学における実績から考察してみよう。大学進学に関して、クラレンドン委員会とトントン委員会の双方は、異常なほどの関心を抱き、その情報を正確に掌握しようとしていた。ここでは、この二つの委員会の報告書を基にして、1860年代における大学進学から見た「パブリックスクール」の地位と序列を明らかにしよう。クラレンドン委員会はOxford大学の24学寮(Colleges及びHalls)とCambridgeの17学寮に在籍するアンダーグラデュエイト全員の出身校を調査した。(表11)

表11. グレートパブリックスクール9校のオックスブリッジ進学状況 1861年

1. オックスフォード大学

学校/学寮	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	合計
Eton	6	25	6	19	4	1	3	1		6	6	1	77	4	1			2	1					1	164
Winchester	2	4	1	7	4	1	14		1	4	2	5	5	2			3	4						1	60
Westminster	2		1	1						1	1		21			1			1						28
Charterhouse	3	1		1	4			1		2	1	1	2	1				3	2			1			23
St.Paul's	1	1	1		1			1	1		1						1							3	11
Merchant Taylors'			2	1				2			1	1			17			2	1						27
Harrow	12	25	3	14	2		2			8	9	4	28	5	4		2	3					1		122
Rugby	14	14	3	12	5	6		3		2	4	7	10	14	2		5	5							106
Shrewsbury	1	2		2				1			1		7	1		2									17
9校合計	41	72	17	57	20	8	19	9	2	23	25	19	150	27	24	3	11	20	4	0	0	1	2	4	558
学寮の生徒数	76	121	36	180	80	78	31	54	4	64	112	47	218	72	67	52	86	87	69	12	22	21	11	74	1674

オックスフォードの学寮: A:University, B:Balliol, C:Merton, D:Exceter, E:Oriel, F:Queen's, G:New College, H:Lincoln, I:AllSauls, J:Magdalen, J:Brasenose, K:Corpus Christi, L:Christ Church, M:Trinity, O:St.Johns, P:Jesus, Q:Wadham, R:Pembroke, S:Worcester, T:St.Alban's Hall, U:St.Edmund Hall, V:St.Mary Hall, W:New Inn Hall, X:Magdalen Hall.

2. ケンブリッジ大学

学校/学寮	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	合計
Eton	1	1		1	5		18		1		1	1	5	48	2	1		85
Winchester														2				2
Westminster					3	2						1		16				22
Charterhouse	1							1						6	2			10
St.Paul's	1	1		2	1	1								11				17
Merchant Taylors'				2				1			1	3						7
Harrow	1		1	3	3	1		2		2	1	3	1	70	1			89
Rugby		1	1	5	2						1	4		28	2			44
Shrewsbury	1		1	2						2		13	5	4			1	29
9校合計	5	3	3	15	14	4	18	4	1	4	4	25	11	185	7	1	1	305
学寮の生徒数	36	41	26	124	77	65	18	43	35	50	80	237	28	500	70	45	8	1483

ケンブリッジの学寮: a: St.Peter's, b: Clare, c: Pembroke, d: Gonville and Caius, e:Trinity Hall, f: Corpus Christi, g: King's, h: Queen's, i: St.Catherines, j: Jesus, k: Christ's, l: St.John's, m: Magdalene, n:Trinity, o: Emmanuel, p: Sidney Sussex, q: Downing.

1861年のミカエルマス学期に、Oxford大学の各学寮の名簿に記載されている学生の総数は1674名で、Cambridge大学は1483名であった。そのうちOxfordでは558名、全体の学生の33.3%が調査対象の9校の出身者であった。Eton 164名、Harrow 122名、Rugby 106名、Winchester 60名、Westminster 28名、Merchant Taylors' 27名、Charterhouse 23名、Shrewsbury 17名、St.Paul's 11名という内訳であった。一方、Cambridge大学では、305名、全体の学生の20.5%がこれらの9校の出身者であった。Harrow 89名、Eton 85名、Rugby 44名、Shrewsbury 29名、Westminster 22名、St. Paul's 17名、Charterhouse 10名、Merchant Taylors' 7名、Winchester 2名という内訳であった。しかし、こうした在学者数に学校の規模を重ねてみる必要がある。各校の1860年の在校生数は、Eton 818名で9校中最大規模の学校で、Harrow 490名とRugby 467名は中規模校、Winchester, Charterhouse校、Shrewsbury校は130名前後の小規模校であった。²⁴ オックスブリッジにおけるパブリックスクールの

勢力図からみると、Eton, Harrow, Rugbyの存在が大きいが、Winchesterのような小規模校の生徒のオックスフォードへの進学率が驚異的に高い点も注意する必要がある。いずれにせよ、Oxfordでは3人に一人が、Cambridgeでは5人に一人がグレート・パブリックスクール9校の出身者なのであった。(図10、図11、図12、図13)

一方、トーントン委員会は、1867年5月に、グレート・パブリックスクール9校を含めた基金立グラマースクールとオックスブリッジ生との関連を調査した。ここではグレート・パブリックスクール9校とMarlborough, Cheltenhamが一つのカテゴリーを形成し、その他のグラマースクール(139校)、共同出資立学校(43校)、私立学校(31校)、家庭教師、海外や植民地の学校、というカテゴリーがたてられている。Oxford大学では名簿に記載のあるアンダーグラデュエイト1857名の内、1360名73.2%から、Cambridge大学の場合、1909名の内、1043名54.6%から回答を得た。Oxford大学では、グレート・パブリックスクール

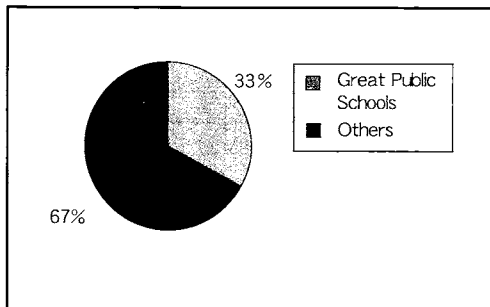


図10. グレート・パブリックスクールの生徒がオックスフォード大学生に占める割合

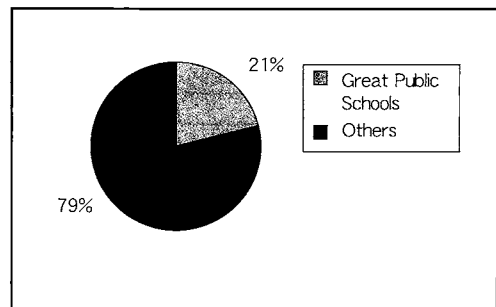


図12. グレート・パブリックスクールの生徒がケンブリッジ大学生に占める割合

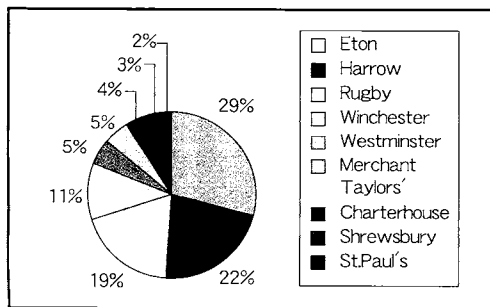


図11. オックスフォード大学におけるグレート・パブリックスクール出身者の比較

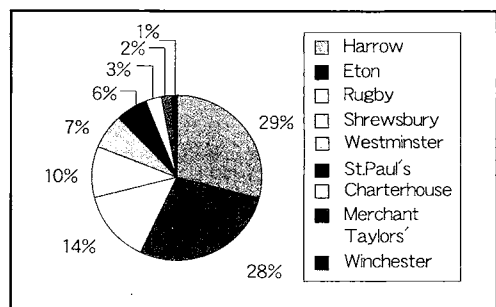


図13. ケンブリッジ大学におけるグレート・パブリックスクール出身者の比較

9校と Marlborough, Cheltenham を加えた 11 校の占有率は、回答のあった Oxford の在校生（アンダーグラデュエイト）1360 人中、550 人の 40.4% を占め、同様にして Cambridge 大学では 1043 人中、243 人で 23.3% を占めている。両者を合計すると、全 2206 人中、793 人で 36% に及ぶ。学校のカテゴリー別に Oxford と Cambridge に進学した学生の割合をみたのが表 12 と図 14 である。²⁵ オックスブリッジの進学者の約 3.5 人に一人がグレート・パブリックスクールと Marlborough, Cheltenham の出身者なのである。

こうしたエリート教育機関の創出とエリート教育機関への上昇は、他のグラマースクールや新興パブリックスクールに熾烈な競争をもたらしていた。この点を、ある学校に 2 年以上在籍し、離学

後 1 年以内に Oxford と Cambridge の学寮に入学した生徒数の調査結果から見てみよう。表 13 が示すように、極めてはっきりした序列が 1867 年に見出される。²⁶つまり、Eton, Rugby, Harrow, Winchester, Marlborough, Cheltenham で上位 7 位を占め、更に上位 20 位以内にグレート・パブリックスクール 9 校すべてが位置づいている。（表 13）1860 年代には、はっきりとエリート校としての「グレート・パブリックスクール」の概念が形成され、オックスブリッジに最も確実に接近し得るエリート教育機関の差別化が進展していた。そしてアスレティズムの興隆は、こうしたエリート教育機関でまずもって生じ、エリートの肉体的、精神的資質に影響を与え始めたと考えられるのである。

表 12. 学校種別オックスブリッジ進学者数

学校のカテゴリー / 大学	Ox. 1	Ox. 2	Cam. 1	Cam. 2	合計
グレート・パブリックスクール, マールバラ, チェルトナム	487	63	207	36	793
上記以外のグラマースクール(139校)	352	24	295	30	701
共同出資立学校(43校)	123	21	108	18	270
私立学校(31校)	16	5	29	5	55
家庭教師	123	15	116	24	278
スコットランドとアイルランドの学校	30	8	18	2	58
植民地及び外国	23	3	22	3	51
合計	1154	139	795	118	2206

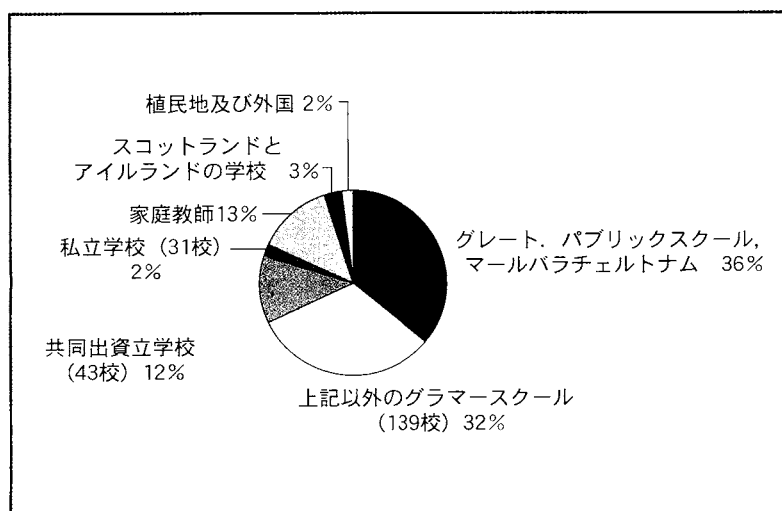


図 14. 学校種別オックスブリッジ進学者数の割合

表13. 学校別OXBRIDGE進学者数（上位23校）

学校名	Oxford	Cambridge	Total
Eton	121	40	161
Rugby	65	44	109
Harrow	71	36	107
Marlborough	59	17	76
Winchester	69	5	74
Cheltenham	28	13	41
Repton	12	24	36
Shrewsbury	13	22	35
Uppingham	12	23	35
Rossall	16	17	33
Merchant Taylors'	20	7	27
Westminster	15	8	23
Brighton	11	11	22
King's Collge	11	11	22
King's Collge School	7	15	22
Manchester Grammer School	15	6	21
Radley	16	5	21
St.Paul's	11	10	21
Bradfield	17	3	20
Charterhouse	15	5	20
Birmingham	9	9	18
Bromsgrove	14	4	18
Tonbridge	10	8	18

結 論

本研究は、「パブリックスクール」というアスレティズムの温床となった私立の中等教育機関の最も基礎的な経営基盤であり基礎的単位である「生徒」の出身階層、生徒数と入学者数、進路の動向に焦点をあてて、アスレティズム史研究の考察に不可欠な基礎的知見、特にその興隆の時期区分を可能とする画期を査定することにあつた。歴史統計を用いてアスレティズム興隆期におけるパブリックスクールの状態を調べた結果、次のような諸点が明らかになった。

(1) グラマースクールの設立動向の統計から、19世紀の初め頃までに、伝統的なグラマースクールの中から principal schools, great schools, seven schools等と呼ばれる学校が出現し、他のグラマースクールとの差別化を遂げ始めた。それらのグラマースクールが1840年頃までに次第に「パブリックスクール」という名称で呼ばれるようになり始めた。また、1830年代から1880年にかけて新設の「パブリックスクール」が急増し、

seven schools や great schools としてのパブリックスクール概念を脱して、より汎化された19世紀的「パブリックスクール」概念を生み出した。

(2) 18世紀には、19世紀に「グレート・パブリックスクール」と呼ばれるようになる学校やその他のグラマースクールに通っていた生徒の出身階層は圧倒的に貴族階級、郷紳・ジェントリー、プロフェッショナルズ（知識階級）、軍人・官吏階級であった。しかし、支配階級のかなりの部分は、依然として上流階級の典型的な教育形態である家庭教育に依存していた。19世紀（1841-50）になると、グレート・パブリックスクールの生徒の出身階層は、有爵貴族の数そのものが少ないことから、主に地主ジェントリー、土地を持たないジェントリー（新興中産階級）となり、その階級の大部分が家庭教育からパブリックスクールやグラマースクールの教育に依存するようになった。またこうした動向は、幾つかのグラマースクールの「パブリックスクール」化を導いた。

(3) クラレンドン委員会の調査対象となった

Winchester, Eton, Westminster, Charterhouse, Merchant Taylors', Harrow, Rugby, というパブリックスクールは、それらのほぼ全てが1840年頃から生徒数を増加させる基調に転じ、「グレート・パブリックスクール」のステータスを築き上げたことを示唆している。また、設立当初の定款の改定をクラレンドン委員会から迫られた1860年以後からは、はっきりと入学者数を増加させる傾向を示し、大規模校化し始めた。

(4) グレート・パブリックスクールに追随したTonbridge, Sherborne, Uppinghamのようなグラマースクールは、1850年代後半から1860年代にかけて、入学者数を増やすことにより上昇し始め、遅くとも1880年代までには100名前後の入学者を受け入れる中規模の安定した「パブリックスクール」に成長を遂げた。

(5) 同じく、グレート・パブリックスクールを何らかの点で基本的モデルにして新設されたCheltenham, Marlborough, Rossall, Radley, Lancing, Haileybury, Cliftonのような新興パブリックスクールでは、入学者数は必ずしも様な変動を示すことはなかった。CheltenhamやMarlboroughのような大規模校は、1850年代から1860年代に、150名から200名の入学者を集める安定したパブリックスクールに変貌しており、後発のHaileyburyやCliftonも1860年代後半以後、150名から200名の入学者を展望できる大規模校となった。しかし、Rossallは100名前後の中規模校に、LancingとRadleyは50名前後の小規模校に止まった。

(6) Rugbyの卒業生は、1830年代から40年頃まで教会や聖職関係の仕事、軍隊、官吏や行政や政治の仕事に就く者が多く、40年代以後には軍隊や法曹関係に進む者が増え、60年代には植民地や海外に雄飛するもの、70年代には企業関係の進出者が増加した。Harrowの卒業生は、聖職に進む者が少なく、1850年以後、軍隊、法曹関係、行政や政治関係に進む者が多かった。一方、大学進学に関してみると、1860年代には、グレート・パブリックスクール9校の出身者がOxfordとCambridgeの学生に占める割合が突出していた。年間にグレート・パブリックスクールからOxfordに進学した者は、Oxfordの新入生の33%を占め、Cambridgeでは20パーセントに及んでいた。分けなくてもEton, Harrow, Rugby, Winchester, Westminster等の出身者が多かった。

一方、1867年の調査によると、グレート・パブリックスクール9校とCheltenham, Marlboroughを加えた11校の出身者がOxfordとCambridgeのアンダーグラデュエイトに占める割合は、36パーセントにも及ぶものであった。1867年には「パブリックスクール」の間に、はっきりとした差別化とエリート校の序列化が進展していた。

アスレティズム史研究を展望する時、特にパブリックスクールの入学者数と生徒数の変動は、アスレティズムの興隆時期だけでなく、それを更に区分できるような幾つかの画期を炙り出した。第一の画期はアスレティズムが成長し始めた1840年頃であり、第二の画期はアスレティズムがその隆盛期に達し始める1860年頃である。そうした画期の仮説は、調査対象校の範囲の拡大と、統一的で長期的な歴史統計の作成を待って検証されねばならない。またこうした歴史統計によるアスレティズムの興隆時期の仮説は、ゲームの組織化動向と重ね合わせて再考される必要がある。そうした綿密な検証を経た興隆の時期区分は、依然として今後の課題として残される。

文 献

- ¹ McIntosh, P.C. *Sport in Society*, London, C.A.Watts & Co.Ltd. 1963, p.69, p.79. McIntoshは「Athleticism」と題された節で、「19世紀後半の間にチームゲームや競技スポーツの崇拜—まさに崇拜であった—は、学校や大学の壁を遙かに越えて広がった」(p.69)とし、19世紀前半にパブリックスクールで萌芽し、組織化され始めたゲーム活動が<athleticism>へと高まりを示したのは19世紀後半であったとしている。更に「アスレティズムは世紀転換期とエドワード時代に最も強烈かつ最も活発であった」(p.79)と指摘している。
- ² Mangan, J.A. *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public School, The Emergence and Consolidation of an Educational Ideology*. Cambridge, Cambridge University Press, 1981, p.18. Manganによれば、アスレティズムは「19世紀の第4四半世紀までにパブリックスクール制度一般の顕著な特徴となった」(p.18)とされる。
- ³ School Inquiry Commission. *Report of the Commissioners Presented to Both Houses of Parliament by Command of Her Majesty. Appendix IV. Endowed Grammar and other Secondary Schools*

- arranged in the Chronological Order of their Establishment, pp.36-90. London HMSO. 1868. 以後, Report of the Taunton Commission と表記.
- ⁴ 齋藤新治 中世イングランドの基金立文法学校成立史, p.3. 亜紀書房 1997 年
- ⁵ Burnet, J.F. Independent Schools Yearbook. 1986 Boys' Schools. A.& C Black. 1986, Passim.
- ⁶ Ogilvie, Vivian., The English Public School, 1957, p.7.
- ⁷ Bamford, T.W., Rise of the Public Schools. A Study of Boys' Public Boarding Schools in England and Wales from 1837 to the Present Day. Nelson, 1967, p.xv.
- ⁸ Ackerman, R., The History of Colleges of Winchester, Eton, and Westminster; with the Charter-House, the School of St.Paul's, Merchant Taylor's, Harrow and Rugby, and the Free-School of Christ's Hospital. London: Printed for and Published by R. Ackerman. 1816.
- ⁹ Report of Her Majesty's Commissioners Appointed to Inquire into the Revenues and Management of Certain Colleges and Schools. London, HMSO, 1864, passim. 以後 Report of the Clarendon Commission と表記. St. Paul's と Shrewsbury は、生徒数に関して十分な回答をしなかった.
- ¹⁰ 非国教派アカデミーの教育については成田克矢の『イギリス教育政策史研究』(お茶の水書房、1966年)に詳しい。1778年～1812年までTonbridgeの校長であったV. Knoxは、『Liberal education or a practical Treatise on the Method of Acquiring Useful and Polite Learning』(1778)を著した。その中で、かれはギリシア語、ラテン語を全ての教科の基礎としながら、その上に歴史、地理、数学、フランス語、図画、音楽、ダンス等の芸能科及び剣術を教育内容に取り入れている。(同上書、p.156) 1798年～1836年までShrewsbury校の校長であったS. Butlerは、第5級と第6級の正規教科として古典後の他に英語、地理、代数、ユークリッド幾何、及び英国史を加えていた。また1828年から1842年までRugbyの校長であったT. Arnoldは、古典後、数学、フランス語の3領域に分かれた教育を行い、その他、英語、ドイツ語、古代史、近代ヨーロッパ史、地理、そして自然哲学を加えていた。(阿部生雄「スポーツ教育とチームスピリット:アーノルド」pp.255-261『体育・スポーツ人物思想史』所収、1979、不昧堂) 一方、Uppingham及びE. Thringは、知識教科を近代化したのに止まらず、芸能科(accomplishments)を設けた。午前中の授業で古典語、英作文、聖書、歴史、地理などの教科が課せられ、午後は音楽と美術の選択教科が当てられた。その他の選択教科にはフランス語、ドイツ語、化学、木工、旋盤細工、図画などが設けられていた。
- ¹¹ Op.cit., Bamford, T.W. p.1.
- ¹² 佐伯正一 第4章 産業革命期の教育問題、pp.288-289. 『世界教育史大系 7 イギリス教育史 I』(梅根悟監修、世界教育史研究会編、講談社 1974)
- ¹³ Hans, Nicholas. New Trends in Education in the Eighteenth Century, 1951, pp. 18-43. (佐伯正一、同上書、p.298)
- ¹⁴ Bishop, T., Wilkinson, R., Winchester and the Public School Elite., p.115.
- ¹⁵ Op.cit., (Report of the Taunton Commission, 1868) Appendix II, pp.6-10.
- ¹⁶ Op.cit., (Report of the Clarendon Commission, 1868), passim.
- ¹⁷ 齋藤新治, 前掲書, pp.3-33. 「慈善の使用」、「死手保守」としての基金については、本書の序章、「研究史的展望のなかの基金立文法学校」を参照せよ。
- ¹⁸ Stapylton, H.E.C. The Eton School Lists, From 1791 to 1850. Every Third Year after 1793. Eton College, 1863., Stapylton, H.E.C. Second Series of Eton School Lists, comprising the years between 1853 and 1892. Eton, 1900., The Eton Register: Being a continuation of Sapylton's School Lists, 1893 - 1899, Old Etonian Association, 1901., 等より作表。
- ¹⁹ Parish, W.D., List of Carthusians, 1800 to 1879. Farncombe & Co. 1879., Girdlestone, F.H.W., Hardman, E.T., Tod, A.H., Charterhouse Register, 1872-1900, R.B.Stedman, 1904, Auden, J.E., Shrewsbury School Register, 1734-1908, Woodall, Minshall & Co., 1909, Mitchel, A.T., Rugby School Register, vol.1(1675-1842), vol.2(1842-1874), vol.3(1874-1904), Wainwright, J.B., Winchester College Register, 1836-1906, Winchester College, 1907,等を利用して作表。
- ²⁰ The Register of Tonbridge School from 1826 to 1910, edited by H.E.Steed, third edition, Rivingstons, 1927. The Sherborne Register, 1550-1950, edited by W.J.Bensly, fourth edition, Warren & Son, 1950.

Uppingham School Roll, 1824-1931, edited by J. P. Graham, sixth issue, H.F.W.Deane & Sons, 1932. を用いて生徒数の変化を作表。

- ²¹ Cheltenham College Register 1841-1910, edited by Alexander Hunter, G.Bell and Sons, 1911, Marlborough College Register from 1843 to 1904, fifth edition, Horace Hart, 1905, St. Peter's College, Radley. Register, 1847-1912. Edited by Wickham Legg, third edition, 1912, The Lancing Register. A New Edition, revised and continued to 1912, by A.J.K.Esdail and Others, Meyers, Brooks and Co. 1913, Haileybury

Register 1862-1910, edited by L.S.Milford, fourth edition, Richard Clay and Sons, 1910, を参照してグラフを作成した。

- ²² Op.cit. Bamford, T.W., p.209.
²³ Ibid., p.211.
²⁴ Op.cit., (Report of the Clarendon Commission, 1864), vol.II, Appendix, p.31.
²⁵ Op.cit., (Report of the Taunton Commission, 1868) Appendix VII, Table II (p.161)を参照。
²⁶ Ibid., Appendix VII, Table III, pp.162-163.